

佳作

「私の未来は、なに色？」

—私の未来は、なに色？—

早稲田大学高等学院3年

山崎航平

私の未来が何色であるのかということを考察するのは、非常に難しいテーマである。言うまでもなくそれが予測できないからである訳だが、本文では現段階における自分の生活や環境を基にしてそれを予測してみることにする。当然、その中には矛盾や不都合が有る訳だが、その点は御容赦頂きたい。仮にそれが実際に起こる未来と大きく異なっているものであったとしても、創作物としての意味は多少なりともあるはずだからである。そしてその未来に何色かという結論を導く。本文の構成としては、まず予測する未来の大きな枠組みを作る。その後、年代ごとに当時の自分の予測をする。

私は現在、都内の高校に通う一八歳である。高校三年間は部活に所属することなく、勉強が大部分を占めていた。それ故、体は運動していない分不健康で筋力もない。このことから自分の寿命は平均より低いと思われる。二〇一四年現在の男性の平均寿命が八〇歳程度であるだろうから、恐らく七五

歳ぐらいであろう。なので、現段階では自分が七五歳で死ぬ、ということにする。私は現在、特に目立ったこともない生活を送っている。毎日が勉強と睡眠と趣味である釣りのローテーションだが、それが不憫であるとはあまり感じない。現段階では私は「スズキ色」とはいかなくとも、「カジカ色」程には言えるのではないか。見た目は悪く小振りでも味は悪くなく、調理法は多様である。

二〇歳には大学の二年生になっている。大学生になると今以上に縛られるものがなくなり、自主性と実行力がなければあつという間に時間が過ぎてしまう。高校生活で実感したが、私にはそれが無い。勉強と適度な運動と適度な遊びを同時に行うことは不可能である。これはおそらく才能の問題なので、今からどうすることもできない。さらに悪いことに、恐らくその環境に自分は納得してしまっだろう。そのような一抹の不安を考慮してこの頃の色は「アカザ色」としておく。清流でアユを釣ろうとしている時にアカザが釣れると非常に気落ちするからである。

三〇歳になると、証券会社での仕事で営業に歩き回る毎日を送っている。人生の中で一番楽しい時期であるはずだが、この頃ちょうど一人っ子政策のツケが回った中国経済の下落に影響され、日本でも景気が悪化する。当然自分の会社でも煽りを受け、上司が不機嫌になる。まるで行き場を失ったサ

クラマスのものである。サクラマスは引きが強いが調理法がムニエルぐらいしかない。

四〇歳になると現状に疑問を持ち始め、現職と並列して教員免許を取る勉強をし始める。この年だともう後がないという自覚があるので、何事にも積極的になっている。その様子は引きが強く、どの魚よりも生命力がある。ただ、年齢が年齢だけに体が臭くなってきているので、それを加味して「ブラックバス色」というのが適当だろう。

五〇歳になると都内の高等学校で教鞭を執っている。担当は物理で、校内では試験問題が難しいということでも有名である。教室の中で授業中、生徒から見た私の背中、とても輝いて見える。そのことから、この頃の私は「オイカワ色」であると言える。

六〇歳になると、ついに石油の枯渇が本格化する。人類は石油の代替エネルギーを結局見つけることができなかつた為、残り少ない資源を求めて、世界各地で暴動が起ころうようになる。人口が激減していく中、この頃の先進国のトップであるインドが本格的に実用の用途が立っていない火星への移住を決定する。他の先進各国も同じ決断をして、人々が続々と地球を発つ中、その頃の私にはそれほどのリスクを負ってまで生きようとする意思がなかった。故郷に残った私の色は、言うまでもなく「イワナ色」であった。溪流でひっそりと泳ぐ

イワナは、正にその頃の私であった。

ついに最期の時を迎える時が来る。地球は一面荒野となつたが、故郷の面影はそれほど顕著には薄れていなかった。病に横たわる私は、未来を望まずとも故郷で逝けることを喜んでた。自分の人生を憂うことなく、客観的な結論でなくとも自己に納得した私の色は、河口で堂々と泳ぐアカメ以外に何があてはまるだろうか。